

十四、時代の推移と蠶絲業者

時代の推移と蠶絲業者

—

蠶絲業法によれば所謂蠶絲業者は養蠶蠶種製造生絲製造真綿製造殺蛹乾繭又は蠶種繭生絲屑物類の賣買仲立若は保管を業とする者をいふ。そこで所謂蠶絲業者は同業者中中々利害の錯綜せるものあるを見る、尤も生絲の賣行盛ならざるに於ては、一體に經濟上旨く行かず其點に於て經濟的利害を一にするが如けれど、其處に至る間に養蠶者と生絲業者との利害常に一致するものではない、生絲業者は繭を成るべく安く買はんとし、生絲は成るべく高からんことを欲する、養蠶業者は生絲はどうであらうとも繭の直段の高さを欲するのである、一口に蠶絲業者といふも其中に利害の錯綜せるもの中々大なるものゝ含まるゝは謂ふまでもない、去りながら蠶絲業者は蠶絲業者であるお互に利害は錯綜しながらどこかに一致する所なかるべからざ

るは、國民經濟の各單位の亦然るが如しである、今引括めて時代の推移に伴ふ蠶絲業者の覺悟といふ論ずる所其機微に入る能はざるは論莫い、その農村に住するものと都會に居るものと、既に經濟思想境遇の懸隔大なるものがあり、その性狀の進取保守甚だ異なるものがある、更に既に蠶絲業に従ふものも、その生絲製造販賣をなすものと、養蠶をなすものと、蠶種製造をなすものと、其經濟上處世上の思想及進退に於て頗る差違なくんばあらずである、然しながら既に養蠶をなすものは其規模の大小を問はず、業の主副を問はず、純粹の農業者より餘程商業思想を進めるものと云はなくてはならぬ、よくいへば文明的農業者である、惡くいへばブルキ者の仲間入りをなしたるものである、そうして今や我邦に於て農村にあつて養蠶をしないものば殆ど莫いといふ状態であるとすれば、而して斯の如きは所謂工業的農業の狀態に進みたるものとして、吾人の慶賀する所である、之を言ひ換れば、所謂養蠶村の地方色が我農村全體を蔽ふやうになることは何としても吾人の冀ふ所、其惡し

きを免かるべからざる點は、所謂文明の陰影、已むを得ずとして、一日も早く我農業が絶対に濃かに斯かる工業的農業の文明域に到らんことを望む前提として、茲にその覺悟を述べんとする、是れ本篇の主意である、蠶絲業者之を讀みて、或は之を無益視し、或は之を有用視し、或は何を言ふものなるか之をよく解せざるものがあるらふ、或は解して之を實現せんとするものもないとはいはれまい、之は讀む者の理解力及其境遇思想の生む所て筆者は唯斯かる最後の讀者の多からんことを望みた

二

政治外交に興味を有たざる國民は今日の世界にては眞の産業者ではない、我邦では従來政黨に主義なく政治家に主義なく、唯鹿爪らしく主義綱領は之を掲げざる政黨はないが、羊頭を掲げて狗肉を賣つても、一般國民は別に關せず焉を極め居つた故に政友會内閣であるか、憲政會内閣であるか、加藤子首相たらんが、原敬氏首相

たらんが、それは實の處農業者商工業者に何等利害損得はない、政友會も農業を發達せしめ、教育を進歩せしめ外交の刷新を圖りと紋切型抽象的の文句を並べ、憲政會も亦同じく農業の發展、教育の進歩、外交の刷新と、少しく措辭修文の方法を變へたのみで、歸する所賣藥の效能書に似たものであるから、内閣が更迭したとて、知事郡長が更任したとて、一般國民にさほどの影響ある筈はない、米國の如く政黨政客はそれ／＼その具體的綱領を有し、彼は何、是は斯うと一々の確たる方針を掲げて之を實行せぬときは、政治家としての自滅を意義することなり居る國では農業者も商工業者も亦皆政治外交に眼を著けざるを得ざる習慣となつて居て、大統領以下一市長が更迭するも、直に己の産業方針を變へねばならぬが故に、世界の狀態にも極めて着眼するのである。それで我邦の農商工業者の如く、國內のみに眼をつけ居るがために、外來の一電報にも喫驚仰天し、風聲鶏喉にも狼狽する様なる事はない予輩は未だアメリカに行かざれば自ら眼に之を視耳に之を聽くを得たるわけではな

いが、併しながら之を彼國の印刷物等によつて明かに其然るを知り、又其當然なる所以を解す當にアメリカのみならず、ヨーロッパ諸國に於ても亦然るを見る、但しヨーロッパに於ては、歴史舊きを以てその色彩多少緩和せられ、アメリカに於けるが如く劇しからざるのみである。

一體全國國民が皆自ら治むること完全なれば、則ち個人的には家を齋ひ身を修め、社會的には秩序公益を尊び、國家的には政治的獨立を全ふし得たるならば、何も今日の如き複雑矛盾齟らざる政治組織機關なくとも用は足る筈であるが、實際完全に自ら治むる個人、社會、國家はないから、司法警察等それ／＼の施設を要し出兵戦争等それ／＼醜惡なる事件の踵起しつゝある有様で、實際今日已むを得ざる事態だと言はねばならぬ。然らば何時になつたらば皆々が完全に自治の立派なる境地に到來すべきか、神ならぬ身の吾人之を具體的には豫言することは出来ない、況んや既に述べたるが如く、農商工業者は政治外交に興味を有たず、之を對岸の火災視ほ

どもせぬ邦家に於てをやである、去り乍ら我邦にても内閣の更迭、知事郡長の更任等が農商工業者の利害に關係を持つに至り、米國の如くに大統領以下一市長が更迭すれば、直に農商工業者己れの産業方針を變へねばならぬ様になるは餘り遠き將來ではないであらう。

三

我邦でも亦米國のやうに、大統領以下一市長の更迭によつて、國民が直に其産業に利害を感ずるやうな有様に立到るは、遠き將來ではないだらうとするは、如何んな理由に出づるかといふに、別に差したる譯合ではない、人類の經濟史之を證明するものであつて、我邦の經濟史も亦然らざる筈がないからである、人我邦を以て東洋に於ける否、全世界に於ける金歐無缺の邦國となすは固より當然であるが、之を以て直に政治組織も社會組織も個人も凡て全然特別なものとの意義に解するならば、是れは全く見當違である、金歐無缺とは萬世一系で一民族的國家なるのみ、其

他は別に他國と殊なる處はない、是故に政治組織經濟組織社會組織の進んだ國のことは臆がて我邦にも起り來るものと覺悟せねばならぬ、但國々によりて國民性異なり、民族心理も異なるものがあるから、多少色彩が異なるのみであるとする。我邦で王朝政治に代りて封建政治起り、封建政治倒れて郡縣政治となり、貴族政治に代りて莊園政治起り、莊園大地主政治倒れて商民政治起り更に之を社會的にいへば近くは、資産階級の勢稍衰へて無産階級漸く力を得んとするが如き、是れ外國既に經來りたる所である、無産階級には勞働者あり、給料取りあり、其利害必ずしも一致せぬが、其無資産階級たるに於て有産とは對立するものである。

農村の地主といふも大小種々の程度がある、その小なるも亦資産階級に屬するものであるが、其社會的並に經濟的位置は孰れかといへば殆んど無資産階級中殊に勞働者側に屬する、無産階級中大なる給料取りは其經濟的位置、社會的勢力は資産階級に近きものである、其の邊一概に之を論ずるわけには行かぬが、併し時勢の推移

に伴ふ地主乃至蠶絲業者の覺悟としては、予輩は彼等が此邊に大に留意すべきを忠告するものである、個人としては交情管ならざるも一旦社會階級として立つときは直に利害全く相反するに至る、農村に於て、地主小作は經濟上相互信賴する境遇に立つものであつて全然相反せるものではない、其狀恰も消費者と生産者、農村と都會、賣るものと買ふものと、固より利害一致せぬが、又何處かに調和の途存するものであらう、併し現時多くの農村地主若くは官憲等のいふが如く、又思ふが如く地主小作の間柄が同じく蠶絲業者にしても其性質上圓滿なるべきものと解するは誤まる、固よりそのやうに之を了解し之を宣傳するは其人の自由であつて、予輩の容喙すべきところではないが、實際に於て斯かる信念によつて誤られ、其罪過を負ふもの、地主小作の兩者にあることは亦疑を容れない、當事者たるもの宜しく深く鑑みる所あるべきである。

之を政治上よりいふも、社會上よりいふも、經濟上よりいふも、地主の世は最早

明治維新前に在つた、維新以後殊に近頃には商工業者の世である、而して將來は漸く無資産者の世とならんとするやうである、斯かる時勢の推移に際して農村の地主乃至産業者の覺悟としては決して政治外交に冷淡なるべからずである、如何なる内閣が朝に立つか、如何なる知事郡長が任にあるか、此等官憲の政治系統の由來其政治經濟上の主義方針は、宜しく之を本人に質すの用意あるべきである、之を質すの用意あるべきであるといふも實は附焼又は剝かれ易い、蠶絲業者自ら之を其營業上其然かせざるべからざる所以を眞に理解せるにあらざれば駄目である、今暫く是が一例として、一會社あり、滿洲産豆粕を直輸入して農村に之を廉價に確實に直接供給せんとするを目的とし、會社は農家と直接に取引するの煩をとらずして、全國の産業組合、同聯合會、系統農會其他の需要者等の力に藉りて、全國農村の豆粕需用額を纏めて之を直輸入せんとする、而して取引上産業組合其他の望みによりては四個月乃至六個月間の延賣をなさんとする、此産業組合手形割引による金融は之

を勸業銀行農工銀行に仰がんとする、而して株主は之を全國の農村に涉りて成べく數株の小株主を募らんとする、此會社は斯かる組織及經營の方針よりして之を推定すべきが如く、營利會社であつて而かも農村本位の公益機關である、即ち此の豆粕直接輸入普及機關は産業組合、農會、勸業銀行、農工銀行等の諸農政機關をして、農村在住者の營利上相互の關係を益々密接せしめ、是等の農政機關が唯官邊の提燈持として、農蠶業者の利害と直接には風馬牛なるが如き從來の疎隔を打破して、經濟上農政上一層の親密を加へしめんとするのである。蓋し農政は固より如何なる政治も國民の利害と一致すべきものである、是れが則ち米國に於て大統領以下一市長が更迭すれば國民は直に己れの營業方針を變へねばならぬ所以であつて、又米國民が世界の狀態にも極めて眼を注ぐ所以である、其の由來する所は人より教へられ求められてするのではない、營利上自ら進みて之を試むるのである、所謂附燒刃ではない、然るに従來我邦の農政は殆んど附燒刃ならざるはない、農民自ら進んで之を

なすのではなく多くは官憲の強て之をなすものであつて、農民は多くは其何の故たるを解せず縦し之を解するも、己れの營業と直接何等の利害あるをみない、若くは利害の多少はあるも、よく之が爲めに動かさるゝほどではないから風馬牛同然である、幸か不幸か、だから從來多くの農政的施設が單に一邊の形式のみに流れたる固より當然である、尤も中には年緒を経たる今日、農民も亦漸く自他營業上の利害に關するものなることを知了した施設となつたものもないではない、けれど我邦の農政の多くは如上の苦々しき殿上人的經歷を帯びぬものは殆んどないのである。

四

所謂附燒刃でなく農民自ら之をよく解するとき、農政の效始めて遺憾なく奏せらるものである、それには農政機關をして、經濟的に營業的に農業者と密切ならしむるに若くはない、過ぐる年熊本縣に於ては有志者相謀りて豆粕五萬枚を大連に涉りて購入し來り之を需要者に直接供給した。ところが、偶々其直段の安く而かも需用

季に間に合つたので、該有志は大に農民の感謝を買つた事實がある、是れ蓋し同縣の農業者は實に滿洲産豆粕の直輸入が農民に大利益たることを人より解き示されざるも自ら眞底に實際之を了知せるによれるものであつて、その附焼刃的農政でないことを示すのである。

五

惟ふに蠶絲業界に在りても、豆粕直接輸入取引が農村に大利益を生ずるが如きことがあらう、現に生絲製造者と其販賣業者との間に於て、或る生絲製造業者の製産品は、或る販賣乃至仲立業者一手販賣を引受け、従て之れが製造資金を融通することなどもあつて、他に有利なる販賣直段を提供するものがあつても、其一手販賣業者が製造業者をして自己よりも高く買入れんとする提供者と取引を結ぶことを強て廢止せんとするものがある、固より自由競争の世なれば人が高く之を買取らんとするとき、乃至高くなくとも他に之を賣らんと欲するとき、從來の取引業者がその高

く買取らんとする者、乃至は新たに取引者たらんとするものに製品を賣ることを阻止することができないのは明かであるが、少くも從來の金融其他の關係を繼續する限りは、生絲製造業者は之を敢てすること出來ぬことの起るは實際である、或は已むを得ず製造業者は其製品の商標を變更して無名の新らしき生産品として、市場裡に之を賣出するが如きことがある、海外市場に既に相當の名聲を有する同じ製品が斯かる事情よりして別に新たに無名の製品として賣出さるとせば、其製造業者の不利大なるものがあるだらう、而かも斯の如きは我邦の蠶絲業界にあつて生絲製造業者の受ける苦痛なりとする、斯かる場合に於ては前述の豆粕直接輸入取引とは全然反對の方向に於て、生絲製造業者が組合ふて直接輸出乃至販賣取引をなすに若くはない、製産者自ら組合的に直接販賣するのである、要するに生絲生産販賣に於て組合運動の重要を認識し之を實行すべきを勸告するのである、聞く所によれば大日本蠶絲會に於ては全國養蠶業者組合を行く／＼成立せしめんと意向ありといふ

が、果して然りとせば斯の點明敏なる蠶絲業者は予輩の贅言を俟たざる所であらう。但一言したきは組合運動と政治運動併立の可能及び組合運動政治運動の目標^{モットー}としてマルクス主義を確立するか、又は政治的運動、社會主義的運動でなく専ら労働組合及消費組合運動を以て終始するかである。マルクス主義といへば其名を聞て恐怖するものがあるやうだが、實はさう恐るゝには常らない、元來労働組合運動の一様式たるマルクス主義は獨逸式ともいふべく、議會運動によりて階級闘争を目標として進まんとするものである、元來マルクス主義は國際主義的なれど、今の處我邦などにはありては、組合運動の國內的統一さへ未だ在るか無きかの有様であるから、先づ／＼ズット先きのこととして之を措いて、今の處、組合運動と政治運動併立の可能を確守し、以て進まば足れるのであらう。

十五、養蠶業者と愛

養蠶業者と愛

今日の社會の經濟組織の本質は交換である、人々は自分の加工品と勤務とを與へ、其の交換として原料品と報酬とを請取る、そして此の交換組織の槓杆ともなるものは爲替手形である、爲替手形の繼續は金の輸送によりて維持せられる。然し這次大戰後の如き金融状態は此の爲替組織の安全性を奪ひ去り、非常な恐慌が起つて此の大戦をなした歐洲人の生活を脅かしつゝあるのだ。

戦争の影響は獨り此れのみではないが、其の様に産業自身を破壊し、又それにより戦前の工場生産物の分量を激減せしめたのである、故に今日歐洲では今單に生産を増加せしめたとしても、それだけでは恢復は出來ない、生産品の輸出先まで選擇が肝要であつて、其處から食料品なり原料品なり物々交換の出來る相手先がなければ

ば、飢餓に陥つた大部分の人々を救済する役に立たないのである、戦争により斯くの如く破壊された経済組織の立直しが如何なる風に出来るか、それとも如何に改造しなければならぬか、ならぬではない、其の必然性がどこに潜むかどうか、それは別問題であるが、兎に角諸の困難の随分甚しい英國では將來我々の食料を我々自身の中から得るために農業の恢復を計らねばならぬと云ふ議論を眞面目に主張するものが社会改造論者の中に顯はれてゐる。

農業は生産のピラミッドの基底である、農業は基礎的のもので農業の改造は其の他の凡べての産業の改造に先行しなければならぬ、地方主義、農業本位を以て産業組織を立直し、従來の儲け主義を排して正義、正直、正當の値段で賣ることにせねばならぬ。道德を離れて純粹に経済的なものは一體あり得ぬ、究竟経済問題の解決は、すべての他の問題の場合と同じく、宗教的内面性にまで立歸らねば不可能である。道德は経済よりも一層基礎的のものである。それ故に我々の経済的實際的活動

は経済の上よりも道德の上へ基礎を置かなければならぬ。

然るに今日の経済組織は此の基調の上に立つて居らぬ、何んでも儲ければよろしいと云ふ主義の上に立つてゐるのである、例へば昔は肥料は人糞尿を取つて直ちに農地に施すのであつた、肥料は人間より得られ、人間は其の畑地より生産するものを食して生活した、自然と人間との間には、健全なる相關關係が成り立つてゐた、然るに人糞尿を汲み取ることは手数の掛ることであり、其の費用よりも廉價に得らるゝ智利硝石やグアノを得ることが出来るとなると、家庭の糞尿は水管にて海中へ流出するに至り、畑地の窒素分は遠く南米より輸入することゝなつた、之れは人間の文化的構造を複雑ならしむると同時に、それに一の危険性を齎らさねば止まぬものである。

機械は現代の産業に於て無限に使用せられてゐる、併し経済組織は機械より獨立して居る筈のものだから、機械の使用せられる場合には、機械を制御することを忘

れてはならぬ、機械を制御するとはその機械の背景に存する、分業制度を制御することである、分業は産業に於ける人間の創造的衝動を破壊する、大機械は大機械程人間を奴隷化し、其の道徳を失はしむるものであるから、我々は人間性の恢復の爲めに或る程度は寧ろ小器械を使用するのが正當である、機械使用の一般原理は機械は人間に従属することであらねばならぬ、現今の機械工業、化學工業には従つて所謂文明の傾向を益々馴致隆盛ならしめてゐるのである。

二

經濟學者が其の經濟組織を或る道徳的前提の上に置くのはアダム・スミス及びそれ以前の學者は皆そうであつた、リカルド以來經濟を全く道徳から引離して論ずる様になつた、殊にマルクスに至つては道徳は却つて經濟に依頼するものとなすに至つたのである、されば前段に述べた様な經濟論は復古的のものである、かゝる復古的議論を新らしき立場の上に唱導する徒の出で來りたるは、現代の經濟組織乃至産

業制度の根本的缺陷を説明するものであつて、當然のことであらうと思ふ。

今日の人間は勞働を搾取することにより、取引することにより、給金により、投機により、其他凡ての寄生的方法によりて生活しようとし、人生の目的に對して有用であり、望ましい仕事を爲さうとはしない、これ今日の山師企業の内凡てがそれである、それ故に人間は金錢を多く獲得するに従つて、それに比例して愉快と閑暇とを得、又個人的勢力と名譽とを擔つてゐる、すべて其の結果は社會の道徳的廢頽である、それは儲けは能率を刺戟することが出来る、とする社會の間違つた考の馴致する所である、然しながら眞實には本統に仕事を愛することのみが刺戟し得るものである。

處て若し商品の相場が不確定なものだとすれば、生産者は安心して其の生産に従事してゐる譯にはいかぬ、それで實際に於て人間の仕事の愛を減ぼす第一のものは、此の經濟的不確定性であるのである、今日生産に於けるものゝ頽廢は貪欲によつて

來れるものとするが、それよりは寧ろ此の生産の不確定性を伴ふ道德的頹廢によるのである、茲に於てか、今日當面の問題を解決する根本的方策は、價格を公定しギルドを復興しようとする所以である、その第一歩としては農業の恢復であらねばならぬ、農業の恢復によつて先づ歐洲だけで食料品を得、且つ品物市場を恢復することが出来る、何故かと云へば食物の價格はすべての他のものゝ價格を恢復するに至ることとなるからである、農業は基礎的のものであるからである。

三

農業も亦一種の企業であるが、我邦の農業はまだ企業化の域に入らぬものといつてよい、尙まだ半自給的である、商工業のように其の組織は一大機械によつて結合せられてゐるのではない、だから右の所論を我が國の農業に適用するとしたら、其の所謂恢復は甚だ容易なものがあるといふてよいのであるが、我が國に於ては幸か不幸か、今やセッセと企業化の域に入らしめんとして、當局者も學者も盡力中であ

る、農業者は其の渦中にあつて、之れを自覺するとせぬとの域に彷徨してゐる状態である。

右は兎に角すべての問題の解決に際して人間要素を第一に顧慮することは、實に大切であつて、今日の多くの人の思ふが如く儲けるといふことは、能率を刺戟するのではなく、實に仕事を愛すると云ふことは、能率を刺戟する第一のものであつて、此の事は商工業にあつてはイザ知らず、農業又は養蠶業にあつては、愛が第一のものの根本的のものであることを私は確信する。

分業は産業に於ける人間の創造的衝動を破壊し、大機械は大機械程人間を奴隸化し、其の道德性を失はしむるものであるとすれば、農業殊に養蠶業は人間の創造的衝動を養成し、動植物を人間化し、其の愛を向上せしむるものである、若しも我々の實際的活動は、最も基礎的であるもののみ關係して居なければならぬとすれば、随つてそれは經濟の上よりは道德の上に基礎を築かねばならぬといふことは、實に

我々の膽に銘せねばならぬことである。

十六、經濟的強者たれ

經濟的強者たれ

米國では物價も引下り、賃銀も下落し生活も安定し、戦後經濟界の整理茲に一段落を告げた、同國の景氣も立直つたものとみるべきであります。而かも同國は今や歐洲への物資の供給を故らに成るべく斷ちて一時退嬰策を極め込む方針であるらしい。これは英國が戦前に握ぎつて居た世界經濟の霸權を米國が奪はんとする野心に出で居るものと解せられて居るがそれはとも角、米國は今や世界一の債權國でありますから、如何に退嬰策をとり物資の購入を他國よりすることを控へ目にしよとしたりたところで、餘りあればどこにか逃ばしるもので、無い袖の振れぬと同じこととあります。——それは反對でありますけれども、てありますから生活必需品は勿論のことと贅澤品とても相應に賣行くに相違ありますまいし、絹絲製品は社會各階級皆使用せられるものでなく、中下階級には贅澤品の様に云はれますけれど、併し其職業上乃

至虚榮上必需品になつて居る位でありますから先づ今日に於ては米國の如き所では社會生活上必需品とみてよろしからう、西洋婦人で絹の靴下をはかぬものは東京などにては殆ど見かけぬのであります。これは彼等の虚榮から出て居るともみられるが、併し又婦人としては必需品であります。絹の方がまことにうつりがよい、花柳社會では木綿物を着ると、肩が張つて按摩代のみとられるので引合わない、おまけに仕事仕が悪いとの事であります我々からみれば、うそのやうであります、實際のところさうらしい。してみますと米國にて上流社會は固より中下流孰れの社會にありまして、絹製品を相應に必要として居るのであります。但し戦時の如き並々ならぬ場合では別であります、平和にさへなれば、獨逸あたりでもクリスマス祭も昨年あたり相應に行はれた位でありますから、米國を始めとし來年位には贅澤品ならぬ絹製品は随分賣れるものとみるのであります。これは別段取立てていはなくてもよい、言ふべきはその我養蠶業に於ける影響であります。

併しこの影響といふても言はなくとも分ります、絹の値段が上がつて來て養蠶業の景氣が付くといふのだらう、成程左様であります、然らば絲價かどの位ならば繭の値段がどの位になりますか、これはそれ〴〵想像が付くとして、それも養蠶家には肝要のことでありますが、それよりも私が肝要と思ひますのは、絲價は幾何でも繭の値段は幾等でも、それはそれとして、これは人爲で先づどうする事とも出来ぬものゝ方でありますから、之はさて置いて、養蠶家はその繭價の範圍内で經濟上自家の享受すべき所得を當然獲得すべきこととあります。これが極めて肝要なこととあります。

いくら絲が高く繭が高くても養蠶家の手に入る所得高が當然其の享受すべき丈夫に入らないといふ事は随分有勝ちのこととあります、勿論各箇人の側では相當の値段より高く賣ると云ふことも出来ます、又高くなく其物相當の値段で賣ると云ふことも出来ます、其物相當の値段で賣れないこともあり、その賣れないのは賣る

者が下手であるのでなくて、上手であつて賣れないことがあります。

今一々實例を擧げて申上ることは出来ませぬから、その理論を言ひますと、生産者のそれだけの所得は極まつて居るが如くで、其實極まらぬので、それは生産者の強いものゝ勝になります、製絲家は繭を安く養蠶家より買取ります、それだけ製絲家は旨くやるわけにあります。ところが貿易商は生絲を其製絲家より安く買取ります、この安くといふのは其本統乃至相當の値段より安く買取することを意味します。然るときは養蠶家は製絲家に製絲家は貿易商のために旨くごまかされたのであります。ごまかすといふと語弊があります別にごまかすのではない。市場の値段で取引しますのですけれども其市場値段が怪しいのであります。これは經濟的强者と經濟的弱者と相對するときに起る所の免かるべからざる營利現象であります。而していつも經濟的弱者は劣敗の側であります。

經濟的弱者といふのは金力も足らず營業團結の足らぬ側の生産者乃至消費者であ

ります。是故に今日にては生産者も消費者もそれ〴〵組合を結んで皆經濟的强者たらんとして居ります。生産者の組合として資本家としては企業者聯合の如きもの、労働者としては労働組合が必要であります。全國製絲貿易業者が相寄つて生絲製造制限乃至販賣制限を行ふが如きは前者であります、養蠶家も生産者であります、若し養蠶家が今日動もすれば製絲家より繭價の壓迫を受くる恐れありとしますれば、矢張り經濟的强者となりて其壓迫に經濟上對抗する外はないのであります。そして經濟的强者になる道は組合を結ぶに若くはないのであります、全國養蠶組合、聯合會の如きはこゝいふ意義があつて出来たのではないかと思ひます。何は兎もあれ養蠶業者も今日にあつては其力を併せて蠶絲業界にありてその經濟的强者となることは其營利上極めて重要であります。

十七、農業と女子

農業と女子

私は今日農業と女子と云ふ題でお話を致さうと思つて居ります、話は大變下手でありますから御解り難いかも知れませぬが、其の邊はどうぞ……農業と女子、女子と云ふと、大變面白いやうなことでも申上げるかと御思ひなさるかも知れませぬが實は大變堅いことであるので、甚だ面白くないかも知れませぬ、斯う云ふ題で申上げる趣意は、我が國の農業に於いては女子が大變重い位置を占めて居りますから、女子の成行は、農業に取りて甚だ心を向けて、よく見なければならぬことであるのであります。御承知の如く農業をやりますに付いては、第一土地——田畑、其の外色々ありますが、第一土地が無ければならぬ、併し土地があつても、それだけではまだ農業は出来ない。それは勞力——人の力、家畜の力、機械の力と云ふものが必要であります。其の人にも色々ありますし、又家畜にも、機械にも色々種類があ

りますが、兎に角勞力を要する、此の土地と勞力とがありまして、それに尙ほ資本と云ふ金が無いと農業をやることは出来ませぬ、是は農業に缺くべからざるものであるから、此の三つを農業の三要素と言つて居る、又之を農業の經濟學の方面から云ひますれば、農業の三つの生産要素であると言ふて居ります、それで、今日は此の農業の生産要素の一つの勞力としての女子のことを申し上げやうと思ひます。

それで私共田舎の生れてありまするが、さう各地を歩いたことはありませぬけれども、田舎を歩きますと、女子が野良に出て居ると云ふことは何處に行つても見ることが出来ます。てありますから、此の女子が農業に對する知識のあると、無いと、或は農業に對する趣味、即ち農業を好くとか、好かないとか云ふことは、農業に取りて、其の生産收穫が多いとか、少いと云ふことに付いて大變關係があります。近頃工業が段々進んで參りました、矢張り大變勞力を要しますので、其の爲に工女、工場で仕事をする女が大變入用になつて來た、勿論田舎から人が都會に出て來るこ

とは昔からあるので、今日に始つたことでない、矢張り女でも女中であるとか、其外色々の働き手となつて出て來ましたけれども、今日は其の外に工女となつて、工場に働く女が大變に多くなつて來た。殊に節季詰つて、勸誘員が田舎に出て來て、色々甘言を以て工場に集めて來る。さうして給金が餘計取れるなど云ふと、暮のことであるから、一度に金が十圓なり、十五圓、或は二十圓も這入ると云ふと、親も大變都合が好いから、後先の考へなく工場に出すと云ふことがよくあります、是は心ならずもさう云ふことになるのもありませうが、又本人が望んで行くのもあります、それは工場に行くと甚だ自由である、都會にある大きな工場になると、皆それぞれ大きな寄宿舎があつて、或は其處に千人以上の人が來て居りますから、大變親の側に居るよりは自由である、勿論時間の間は働かなければなりませぬけれども、何かと大變自由である、であるから誰さんが美しい着物を着て居る、どう云ふ甘い物を食べて居ると云ふやうなことで行きたがつて居る者も大變あるやうであります。

さう云ふことと出て来ます、是が大變悪いことになつて居る所が随分あるやうに思ふ、それは工場に働いて居りますと、時間はちやんと時間で以て働かなければならぬから、其の方は宜いのでありますけれども、さう云ふ善いこともある代りに色々悪いことを覚えるのであります、一體工場に居ると云ふことは、畑に出て居るよりは非常に體に悪い、衛生の設備も行届いて居らないし、ごみも立ちますし、人の吹く氣息などで、工場内の空氣は随分腐れて居りますから、さう云ふ氣息を長い間吸ふて居ると、體が未だ疲れなければ宜しいけれども、疲れてからは、それが尙ほ利くのであつて、さう云ふ所で一定の時間縛られて働きますと、随分體の爲に悪い、それが爲に色々な病氣が起る。是は畑にやつて居るのと大變違ふ、畑であれば厭になれば、自分の畑でありますから、自由に休むことも出来ませんが、さう云ふところが工場では出来ないから、體が随分悪くなる、それから悪い風儀を覚えて、買食などをしたがる、多少小遣を貰ふて、それを使ふことは自由でありますから、どう

しても悪いことを覚える、又よく言ふことであるが、女が三人寄ると姦ましいと云ふ、一人なら宜いけれども、大勢集ると、悪い事をします、それに加へて側から誘惑をする、悪い事を教へたりする者が随分ありますから、さう云ふやうなことで大變風儀が悪くなつて居る、それで善い事も覺えますけれども、第一體が悪くなつて、其の上に風儀が悪くなると云ふので、一年なり、二年なり、或は三年なり、工場の生活を送つて、田舎に歸つて来ると、甚だ困るのであります、その人は家庭の主婦になることが出来なくなる、工場に居ると、其の方に働かなければならぬから、恰度裁縫のことや、畑のことを覚えなければならぬ間にさう云ふことをして居りますと、家に歸つて畑のことも出来ないし、裁縫を知らないから、第一亭主の着物を着せることも出来ない、親の所に居れば畑のことも覚え、料理も覚え、裁縫も覚え、それが出来ない、却つて美しい物を着たがつたり、買食ひばかりしたがつて居る甚だ困るが、さう云ふことが随分ありますから、それが爲に外に出したのを後で

後悔する、先に後悔すれば宜いが、それが出来ないから、後で後悔する、それが爲に家庭を造つても、さう云ふ家庭では随分風波が起りまして、亭主も酒飲になり、遂には一家擧つて農業のことを棄てると云ふやうな現象が随分現れて居る、併ながら是は止むを得ないかも知れぬが、農家の經濟と云ふ方面から云つて、甚だ困ることであるし、又國家の農業と云ふ大きなことから云ふても、大いに困る、それが爲に農業の生産が減るので甚だ困ることであるが、又一方から云ふと、仕方が無い、それだけ社會が進んで来て、工業が發展して來た爲にさう云ふことが起るのであるから、止を得ないことである、併ながら之を止を得ないと云ふて、打棄て、置きますと、益々其の弊害が烈しくなつて來まして、遂に回復することが出来ないやうになります、それであるからして此の際其の間に立ち、之をよく調和して、さう云ふ弊害の無いやうにしたいと云ふのが、農業家の望みである、是は工業家、即ち工場の經營者の方から言ふと、さう云ふことはどうでも宜い、工女さへ望むだけに集めて、

さうして自分の仕事をやつて行ければ宜いのであるから、さう云ふことは餘り望まないかも知れぬ、尤も工場の衛生であるとか工場の空氣と云ふやうなことにも注意して居ります、併ながら此方の農家の方で望んで居ることまで、やつて居ることは、それは又出来ない、であるからどうしても農業家の方からして、農業家の側に立つ者からして、さう云ふ弊害を防いで行かなければならぬ、で、先程申上げた如く、田舎から工場に出て來ると云ふことに付いては、一方から之を進める者がありますけれども、亦一方から云ふと、農家の經濟からそれをしなければならぬと云ふやうなこともあるのでありますからして、此の方からも、亦考へなければならぬ、世の中は皆お互であつて、誰が獨りでよく立つて行くと云ふことは出来ない、所謂共同生活と云つても、皆お互に相助け合つてやつて行くのであるから、工業の爲に農業が非常に困ると云つても、自分獨りよくなると云ふことは出来ないから、自分もよくなり、他のものもよくなると云ふ風の策を取らなければならぬ、それに付い

てはどうしたら宜いかと云ふのが、今日も話したいと思ふことであつて、あなたが村に御歸りになつた時にでも御参考になれば大變宜いことであらうと思ふて、申上げるのであります。

第一はさう云ふ工場の生活をした者は餘程調べてからしないと、一家の爲に大變宜くないことがある、器量が佳いとか、或ひは土地がある、金があると云ふやうなことはかりて嫁などに貰ひますと、さう云ふ生活を營んだ者は、必らず善くない、善い人もありますけれども佳い人でも、どうも赤い物に交ると、赤くなりますので、さう云ふことをやつた者は餘程注意してから後に貰はなければならぬことでありませ、それから尙ほ家庭の親たる者も、さう云ふことは自分の經濟から止を得ないことであつても、よく注意をしなければならぬ、即ち勧誘者などの甘い言葉に乗ることをしないやうによく注意をしなければならぬと云ふことである、是はまあ農家自身の側に於いての注意であつて、農家に注意があれば出來ますけれども、他に成るべ

くはさう云ふことの無いやうに仕向けなければならぬと思ふて居るそれにはどう云ふことをやるかと言ふと、矢張第一は教育が先に立ちます、教育と申しますと、農業の教育でありますが、此の農業教育にも色々廣くありまして、本當の農業の知識だけ、即ち畑に於いて色々な物を作つたり、或は家畜を養つたりするとか云ふやうなことばかりのことも教育で、勿論それは主たる教育でありますけれども、其の外に色々な教育があります、それに付いては矢張り田舎に於いても面白く暮すことが出来るやうな方法を取ることになければならぬかと思ふ。是は獨り女子に對することはかりでなく、男子でも矢張りさうである、どうも二年なり、三年なり都會に來て居ると、都會の美しい風にも染まりますけれども、悪い風に染まり易いのであつて、其の風に染まると、田舎に歸りたくない、私の知つて居る村の人なども随分田舎から東京に來て居る、所が途中に出喰はすと善いことをして居る人もありますけれども、随分厭なことだと思ふやうなことをして居る者がある、甚だむさくる

しいことであるけれども、便所などに白い粉を振り撒いて歩くと云ふやうなことをやつて居る者が随分ある、さう云ふことを東京でする位ならば、田舎でそれをやつて居つたならば大變都合が良い、田舎なら誰もさう云ふことをやつて居るので、殊に農業に大切な肥料をやるのであるから大變好いけれども、それを熊々田舎から東京に来て肥料を汲んで居ると云ふやうな者が、今日男でも随分あります、それは好んで東京に出て来る者もあるが、併しながら来て見れば善いことばかりでないから、さう云ふ厭なことをやつて居るのも随分ある、それで一旦來ますれば、なか／＼歸れない、さうして又東京に出て來ますと、東京の好いことばかり言つて、さう云ふ職業をすると云ふやうなことは言はない、活動寫眞がどうか、どう云ふ活動寫眞を見たことがあるとか、さう云ふことを引張り出して来る、さうすると人は何でも偉くならうと云ふ氣を有つて居りますから、皆出て來ます、尤も少年時代には皆偉い者にならうと云ふ氣を有つて居るのでありまして、それも無ければならぬ

が、さう云ふ爲に随分やつて来る、田舎では身を立てることは出來ないから、人の知らない都會に出て、身を立てやうと云ふ動機で以て出て來るのでありますから、宜いのでありますけれどもそれが若も田舎に於いて楽しく暮し、又面白く出來ると云ふのであれば、さう出て來ないかも知れない、どうも田舎にはさう云ふ設備が無い、偶にはお祭のやうなこともありますし、又盆踊のやうなこともあります、是も僅なことであつて、さうさう無いのでありまして、どうも愉快にやつて、終日の長い間の骨折を慰めると云ふ設備が無いから、さう云ふ方面に向つての設備を田舎の方でもしなければならぬ、さうしますと、誰も自分の故郷に居ると云ふことは望むのでありますからして、それでも進んで來る人はありませうけれども、厭であるのに出て來ると云ふことは少くなるだらうと思ふ、さうしますれば、従つて女子が都會に出ると云ふことも矢張り少くなるだらうと思ふ、

それから尙ほ工女として女子が都會に出て來るのは、斯う云ふ工女を募ります工

場が都會にあるからである、であるから、此の工場が段々と地方に設置されるやうになりましたならば、大變都合が好い、即ち都會に出て来て、寄宿生活と云ふことをせずして、自分の家庭から通ふことが出来まするので、自分の家庭から通ひますれば、常に自分の親、兄弟と共に樂みを享けることも出来まするし、又監督も受けます、さうして親身の監督を受けますると、晝は工場に行つて居りますけれども、家に歸れば又其の悪い生活を矯め直すことも出来ますし、又裁縫のことなり、或ひは家庭の臺所のことなりが出来ますから、大變都合が好い、家の助をすることが出来る、一體田舎は収入のあるのは年に一度か、二度でありまして、無い時は少しも無いので、是が非常に困る、それで工場に這入れれば時々金が這入りますし、或は一度に前金を取れますから、大變生計を助けます、さう云ふので前に申上げた如く工女として外に出るのでありますから止を得ない點があります、所がそれが田舎に工場が出来て、家庭から通ふことが出来ますと、今申上げたやうな譯で大變都合が好い

實は今日さう云ふ具合に工場が無いやうであるけれども、併ながら製絲の盛な所であつては、——或は製絲地方の御方も御出でになりませうが、さう云ふ所では矢張り何百人の工女が、其の製絲工場に通ふて居る、勿論之には弊害もありませうけれども併ながらさう云ふものが田舎にありますと、大變違ふで、製絲で繭から絲を取る是は女の仕事であつて、今日盛にやつて居ります、所謂機械製絲と云つて機械で製絲をするのでありますが、其の製絲工場は矢張工場組織でありますから、先きに申上げたやうな弊害はどうしてもある、所が製絲地方の方は御存じであります、坐繰製絲と云つて、自分の手で坐繰機械を廻して製絲をするものがある、是である、家でやつて居るのであるから、工場に行かなくとも宜い、だから是は又一層宜い、地方に工場があつて、其處に通つてやつて居るのは都會に工場があつて、やるよりは宜いのであるけれども尙ほ一層、自分の家でそれがやれると。大變都合が宜い、此の坐繰で以て有名なのは上州の碓氷社であります、一體機械製絲の方が坐繰

よりはよく出来ますけれども、横濱で機械製絲にも負けない聲價を有つて居る、値も高い、是はどう云ふ譯であるか、機械でやつた方が宜いので、坐繰は悪いのであるけれども、此の碓氷社の製絲が評判が好いと云ふのは何であるかと云ふと、是は家々でやつて居るので、人事でない、自分の仕事であると思つてやるから、自然絲の良い物が取れる、是は組合でやつて居りますが、會社でやりますと、金を出す人と、働く人と互に違ひますから、利害が一致しない、所が組合であると、金を出す人も、働く人も皆一緒であります、だから人事でない、そこで以て大變違ひが起るそれで碓氷製絲の坐繰と云ふものが聲價があり、評判が好い、さう云ふ風に坐繰で以て、家でやると云ふことは總ての點に於て大變都合が好い、で、さう云ふ風に家でやることは、農家の方で之を副業と言つて居る、大仕掛で大變人を使ひ、大變金を遣ひ、さうして大變な建物を遣つてやるのが工場であつて、小仕掛で家庭内でやるものは皆副業であります、同じ種類のもので、遣り方に依つて、一方は工業と

なり、一方は副業となる、だから今の製絲の如きも工場でやつても宜いのであります、さう云ふ副業的に小仕掛でやつても良い物が出来ますから、工業品もさう云ふ風に成べく小さくやつて貰へば農家の爲に大變都合が好い。勿論工業の前途から言ひますと、それは工場製造と云ふものは榮へるものであつて、又さう云ふ風にやらなければなりません、良い物を造るとか、澤山色々な物を造ると云ふだけでは、其の外のことを考へなければ、いけない、それが爲に人の體が悪くなり、或は風儀が悪くなるとか、道徳が悪くないと云ふやうなことではならぬ、是は大切なことであつて、さう云ふ體が弱くなつたり、或は風儀が悪くなり道徳が衰へて來ては、如何に澤山あつても、亦金が澤山あつても役に立たない、即ちさう云ふ點において、田舎に於て單り農業の生産物を作るばかりでなく、工業品を造ると云ふことは總ての點に於いて大變都合が好いだらうと思ふ、だからして工業の方からも、成べく工場は其の地方に於いて、交通なり、何なりの便のある所に設けるやうにして、

さうして其處に工女を集めるに付いても、其の地方の工女を使ふやうにして、やつて貰へば、農工業共に大變うまく發達して行くことになるだらうと思ふ、勿論今日はさう云ふ方針になつて來て居る、之を經濟學の方では工業が分散すると言つて居る、此の工業の分散と云ふことを今日各國でやつて居るのである。是は何故さう云ふ風にやつて來て居るかと云ふと、是は矢張り農業の爲にやつて居るのであるが、獨り農業の爲ばかりでなく、又工業の爲にもなると云ふのでやつて居ります、斯う云ふことが行はれて來ますと、矢張り男でも、段々都會でなければ腕が振へないと云ふことでなくして、田舎でも實業上隨分腕を振ふことが出來ます。従つて女子も都會に出ないやうになるのだらうと思ひます。

それから、尙ほ地方に於ては小學校に於いて農家の子弟に農業のことを授けるやうになつて居ります、併ながら女子には餘り授けないかと思つて居る、裁縫であるとか、其の外のことをやつて居るが、農業の知識を與へて、其の方の趣味も増して

やりたいと思つて居る、女子に適する農業の仕事と云へば、實は米なり、麥なり、あゝ云ふ物を作つて、畑に出ると云ふのは勿論であります、或ひは蠶を飼つて、絲を取るとか、或ひは園藝、果物であるとか、花を作るとか、或ひは果物から、罐詰のやうなものを作るとか、或ひは牛や馬を飼ふとか、或ひは山羊を飼ふとか、豚を飼ふと云ふやうなことが適して居る、あゝ云ふことは家に居つてやりますこと、極く注意を要することであり、又親切にしなければならぬことでもありますから、さう云ふことを習はしたい、さうしますると此動植物の愛に引かされて地方を去ることは出來ないことが隨分ある、自分で手掛けた馬や牛と云ふものは之を手放すことが出來ない、動物と云ふものは非常に可愛らしいもので、恐いやうに思ふのは、知らないからである。さう云ふ趣味を與へますと、矢張り外に出ることが幾分か防げるだらうと思ふ、是は其の人に依りますけれども、多少あるに違ひない、さう云ふことが今日まで缺けて居る、勿論さう云ふことは小學校で多くやることは

出来ない、それに就いては上流社會、中流社會、又下流の者でも皆必要である、外國の殊に獨逸に於いては女子の農業的の家政學校が田舎に多い、だから上中流社會の者でも都會に出て來なくても皆田舎で教育を受けることが出来る、さうして家政のことを習ふと同時に矢張り農業上の技術を學ぶことが出来るやうになつて居る、だから剪定、果樹の枝を剪ると云ふやうなことは女子が自らやつて居る。それから家畜を飼ふとか、乳を搾ると云ふやうなことは、女子が自からやつて居る。さう云ふことは皆家でやることであるから女子がやつて居る、さう云ふ學校が澤山あります、日本でも地方にさう云ふ學校がありがたいのです、それは官立なり、縣立でやつて居る者もあれば、或は大日本農會のやうな公共の有志の會の經營で、さふ云ふ女子の農業的の家政學校を立て、居ります、さうしてなか／＼盛でありまして、さう云ふ所から教育を受けて、出た女子は地方の小學校の教師にもなり、或は又村の褌母になる幼稚園に行きますと、子供の守をして、色々のことを教へて居る、褌母と

云ふ者があるが、其の學校を出た者は農村の褌母になつて居ります、さうして又さう云ふ所の教育を受けた女子は、家政のことばかりでなく、農業の技術ばかりでなくして病人の看護の術も心得て居りますから、何かあつても大變都合が好い、直ぐ其の人の世話になると云ふやうなことで以て、農村の褌母と云ふものはなか／＼村の人に可愛がられて居ると云ふことであります、さう云ふ者がありますと、矢張り農業の爲にもなりますし、即ち工女になつて人が出ると云ふやうなことも大變防げるだらうと思ひます。

先づ大體申上げましたが、まだ外に残つて居ることがありますかも知れぬけれども、まあさう云ふやうな方策を執つてやりましたならば、工女が田舎から出て來ると云ふやうなことは大體防げるだらうと思ふ、併し田舎から出て來ることを防いでしまつて、全く出て來なくなつても困る、それは獨り工業の方で困るばかりでなく先程申しましたやうに社會經濟の方で困るのでありますから、出て行くことを全く

止めるのではないが出て行つても悪い弊害を農業が受けたくないやうにしたい、農業ばかりでない、農家が受けたくないやうにしたい、お互に國の爲に盡して居りますが、身が立たなければ國に爲に盡すことは出来ない、口ばかり幾ら國の爲に盡すと云ふても身が整はなければ國の爲に圖ることは出来ない、身が整ふて後に初て國の爲になるのである、田舎ばかりでなく何處にでも随分奔走者と云ふ者があつて、村の爲であるとか、何とか言つて、騒いで居つて、自からの生計が立たないで、自分の妻子は襤褸を着て、他から助を受け、物を貰つて歩くと云ふことがある、それでは大變困る、さう云ふ奔走者は無い方が宜い、却て自から働いて貰はなければならぬのであります、さう云ふことは身が立つて後にしなければならぬ、であるからして農業の爲めばかりでなく、農家自身の爲にならない、農業の爲と、自身の利害の反對することが随分あります、是は自分の立場から考へて貰はなければならぬ、人に勧めに付いても國の爲であると云つても、さうはいかないことがある、勿論場合に依

つてはさう云ふことを言ふて居られない場合が随分あるが、是は普通の場合を申上げるのであります、此のことは今あなた方のお役に立たないのでありますけれども將來の御注意になるだらうと思つて居る、それだけにして置きまして、此席を去ります、甚だ……。

十八、農學の話

農學の話

農學に精しい農業者と左様でない農業者と相並んで同じ村で農業を営むとしまして孰れがよいかといへば農學に精しくて農業をやる方がよいといひませう、併し實際に於ては農業に精しい人が旨く農業をやつて居るとはいひ得まい、却て農業者として失敗せぬとも限りませぬ、失敗すれば農學など何にもならぬといふ人があるかも知れぬが、それは農學のせいではなくして其人の至らぬせいであります、農學などに餘り構はぬ老農が農業を旨くやつて居るのも固より多い、それだから農學などは餘り拘泥せぬでよいとはいひ切れませぬ、そういう人が農學をやつて居たら尙更成功するのでありませう、學問は何事にも有要であります、それで今農學はどういふ學問であるか、その大體のお話をしたいと思ひます。

農學は普通二大分科に分れます、一は農學通論で一は農學各論であります、農學

通論は廣義の農業經濟學でありまして、農學各論は農業生産學であります、農業各論とは土壤學、肥料學、作物學、園藝學、畜産學等でありまして、それ等の各學には又それ／＼基礎となり、又それを更に有効になす補助の學も入ります、例へば地質學、土性學、岩石學、化學、物理學、動植物學、氣象學、土木學若は農藝化學、農業物理學、農業動物學、農業植物學、農業工學、飼料學、動植物生理學、動植物病理學、昆蟲學、微生物學等がそれでありまして、農學通論は是等應用各論を學んで之を農業の殖培に應用するに方りまして最も旨く遣り遂げやうといふ研究でありまして其研究の成績は直ちに農業の經營に用ふべきものであります、實際には其儘てはゆかぬのであるといひたい、農業經營の原則ともいふべきものなれば、其儘用ひて宜しきこともあれど、其儘てはゆかぬ、多少變へて用ひねばならぬこともありません、されば當事者が諸種の事情を考へて取捨折衷すべきものであります、さすれば農學は二分科に分れますが、農業者のために農學を教へやうとするときは、是非

農學通論、農學各論も同様に重きを置かねばなりません、更に職業教育として農學校を見るときは、例へば今日各府縣にあります所の農業學校は寧ろ其教育の方針を農業經濟に關する學問に集中せねばならぬものであります、今日の實際ではどうでありますか、餘り其方の教育に重きを置かないのみではありません、等閑視して居る位であります、是れは今日の農業教育、殊に職業教育としての農學校教育の大缺點であります、どうか改めたい。

農學は農學通論と農學各論の二分科に分れます、そして農學各論に屬する學問は前に申しました、農學通論即ち農業經濟學の部門に入るものは農業經濟學(狹義)農業經營學、農業評價學、農業簿記學及農政學であります。

農業經營學は農業經營に要する材料即ち土地、勞力、資本等の用方及效果に關する研究を主として取扱ふものであります、それだから農業經濟學(狹義)の中に入れて論じてもよいのであります、農業經濟學は農業の生産要素即ち土地、勞力、資本

の性質、其結合、組織、其の管理に關する理論を主として研究すべきものであつて此の理論の應用に關する事項は即ち農業經營學に入るのであります、農民生産要素たる土地、勞力、資本の三者を農業者が用ふるに方りましては成るべく安きものを選ばねばなりません、安いといふのは必らず貨幣を支出する額の少なさを意味しませぬ、その用途に應じて成るべく多く效用を有する材料を選ばなくてはならぬ、必ずしも支出貨幣額の少なきのみでありませぬ、俗にいふ割のよい物の意義であります、此割のよい物を選ぶには其材料の評価が要用であります、土地を買入れる、肥料を買入れる、家畜を買入れる納屋を建築するとき、米麥を賣る、繭を賣る、卵を賣るとき、成るべく之を安く買入れ高く賣渡すとき其物の値段を定めるに其價格の由て來る根本から評價せねばなりません、これが評價學の取扱ふ事項であります。

農業を經營するには土地、勞力、資本の三者が要ります、此等の生産要素を使ふて農産物が生産されます、それには材料、勞力、金錢などの支出が要ります、又此

等の生産物を賣渡しますときは収入があります、これを一々帳面に記入して各項目を擧げて間違なく記帳する事が簿記學であります、我々は日々小遣帳をつけます、此小遣帳の記入を怠りますと、何に是れ丈けの金錢が要つたか、後日では忘れて憶ひ出すことが出來ぬ勝ちでありませう、或はどの項目で餘計金錢が支出されたか、菓子か、牛肉屋か、活動寫真か、分りませぬことがあります、それが記入してありますと、他日この點に不要な支出をなしたから、この項目を切詰むれば小遣が樂になるといふことが分ります、又遣ひ過ぎてなくて遣ひ足らぬことがあります、遣ひ足らぬからとれる物がとれぬ、ある收穫がないといふこともあります、そういう點も記帳によりて分ります、そうして此簿記學によりて農業の收支を調整することも出來ます。簿記學は斯様な役目をなします。

以上に於て農業經濟學(狹義)農業經營學、農業評價學、農業簿記學を説明しました、それでこれから農政學に移ります。

農政學は農業政策學であります、即ち農業の發達を謀ります政策を研究するのであります、政策と申せば經濟政策でありますから、經濟學に屬します、そうしますれば農業政策即ち農政學は農業經濟學に入るべきものといふことが分ります、農業政策は經濟學からいひますれば無論其學問に入りますが、農業經濟學が既に農學の大分科でありますれば當然農學中には入れなくてはなりません、農政の學問のことを農學より除外するは分らぬこととあります、之を除外すれば農業經濟學をも除外しなければ徹底せぬのであります、ですから單に農業經濟學と申せば普通の農業經濟學も農政學も農業經濟學に入ります、それで前に狹義といふ二字を挿入して限定したのであります、廣義にいへば農政學も普通の農業經濟學も經營學も評價學も皆農業經濟學の中に入ります、農政學は農業の發達を謀る研究であります、其意義中には公力、細かいへば國家の強制力といふことを含んでをります、國家には限りません公共團體でよろしい、兎に角さういふ團體の爲す所の仕事といふ意義が含まれて

あります、併し農業政策として必らずしも強制力を伴はぬものでなくてはならぬとはいひませぬ、強制力が伴はぬ個人乃至普通の團體の政策でもよろしい、矢張農業政策であります、若し強制力がないといふとその效果の擧ることを期し得ぬから苟くも政策といへば國家などの強制力を伴ふものでなくてはならぬとするは偏窟になります。それは效果論になります強制力がなくても随分農業の發達を仕遂ぐることは出來ます、從來幾らも其例を擧げ得ませう、斯かる觀念を有するのは近代の國家觀に毒せらるゝものであります、農業經營の實績より延て農業の發達を馴致せる例は幾多の村落に見得るのであつて、それは強制力を伴はぬ政策の例であります、然しながら農政學は主として公共經濟の立場より政策を論じます、農業經濟學は私經濟の立場より主として之を論じます二者の均しく農業經濟學でありながら其異なる所以であります、又異ると云ひましても又一致する所もある筈であります、それは私經濟の立場から立てた政策と公經濟の立場から立てた政策とか衝突せずして旨

く合致せる時であります、それは常とはいはぬが多く有勝の事柄であります。

農學は普通二大分科に分るといひまして、其大別を述べ來りました。乍併詳しく申しますれば實は三大分科にならなければなりません、それは総合農學、通論農學、各論農學の三大分科であります、通論農學、各論農學のことは農學通論、農學各論と申しました。

総合農學は農業史の掌る所であります、各論農學と通論農學との教ふる所によりて農業生産要素を組合せ生産に取懸ります、そしてその生産せるものを賣捌き又其材料を買入れ收支の餘剰を生ずる様に經營するこれが農業であります、その生産要素の組合せ、生産の技術、管理の方針は通論農學の教ふる所に出でますが、その教ふる所の由て來る所が更に奥に在らねばなりません、これは哲學、更に歴史哲學の掌る所であります、唯斯く申したばかりで詳しくは茲に申上げませぬ、これで農學の話の大體を述べたつもりであります。

近頃は農村に於きまして、地主、小作の衝突が全國を通して頻發してきました、これは農業労働問題乃至農村問題として農業の發達及農業者の利害休戚に重大な意義を有します、さういふ問題の解決には通論農學のみでは駄目であります、無論各論農學の與らぬ所があります、そこで総合農學存在せねばならぬ理由であります、これによつて農業は生きて參ります、自然を相手とする靜的方面の學問でなくして動的學問となつて來るのです、農村の技術者となりまして農業者相手になるには靜的方面の知識學問のみではいけません、動きがとれませぬ、是等の問題乃至事項は農政學に於て勿論論究しますがその研究の方針はどこから採り來りませうか、総合農學の領分であらねばなりません。(完)

農村厚生問題終

大正十四年五月十日印刷
大正十四年五月十三日發行

農村厚生問題

定價金二圓八拾錢

著者 石坂橘樹

發行者 東京市神田區錦町一丁目十六番地

宮下軍平

印刷者 東京市神田區松下町七番地

佐藤磨

印刷所 東京市神田區松下町七番地

明治印刷株式會社



發行所

東京市神田區錦町一丁目十六番
振替東京三四〇九番

二松堂書店

541
64

終